

一の公園白山神社へゆく。社は古雅愛すべし、左りに蓮池がある、蓮池を前にして茶亭がある、堤の上から洋々たる信濃川が見える、上流にあたつて角田彌彦の山々が遠望されるそうだが、生憎霞があつて姿を出さぬ。招魂社へゆく、高臺で市中が少し見える。俚は日和山に向ふ、海拔二十尺の砂山からの眺望は中々大きい。下は海水浴場になつてゐる。更に信濃川の河口に向ふ、燈臺がある。新潟で見るとは只これだけ、景色は詰らぬが、まだ名物で見せるものがあるといふて、最後に行形亭で三人の美人を見せられた。

所 感

東京から越後へゆく人は、信州路を越へると何となく暗い處へ入るやうだといふ。越後から東京へ歸る人は、信州地へかゝると何となく明るい處へ出たやうだといふ。深山幽谷なら知らぬこと、比較的平野の多い越後は、決して暗い國ではない。暗いといふのは色の貧しいことであらう。松の幹もイヤに黒い、緑も冴えざへしくない、海の色も蒼黒い、町や村にも色彩がない。野に働く人に、關東のやうな赤い帶や袴を見ない、越後は色のない國である。

色は乏しいが、越後は氣樂な國である。上州や信州や、人氣のよくない處から越後へゆくと、あまりに懸隔の甚しいのに驚く。夜る戸締をしない村がある、實印といふものは、平生入らぬものだと、名札をつけて役場へ預けつげなしの處もある。米が澤山あがつて、石油が地から湧いて、魚がやたらに獲れる。

天恵の多い上に、人は勤勉で、仕事の出来ぬ冬は、他國へ出稼する。儉素を守つて無駄遣ひをせぬ。夫故、貧民がなく、自から豊かで暢氣である。この國に住んでゐたら、さぞ長命するにとであらう。

* * * * *

うつくしの	佐渡が島	あはく見えて
あらいそに	うちよする	浪の音たかし
はまきけふ	あまたさきて	すな道ながく
秋の日を	ひらくと	黄なる蝶とぶ

○

袖が浦にて

畔

川

我立てり荒らき磯邊に我立てり

流人の如き胸の思ひや

風強き日の夕暮の海に立つ

二人が前に墨雲下り來こ

さはがしき君が心は君が瞳めは

我が砂に書く文字も得よまじ

生垣の鄙の海邊の我が宿に

姿ゆゝしき戀人は來め

かくて世に我等二人がほるぶべき

眞珠の海の荒るゝ波かな